

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (68)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

words から text 文へ、そして **thematic pattern** の発見は今日的には生成 AI も関わる。Ogden 言語学(ogdenology)を背景に①分かる ②覚える ③使えるで①と②は **input / coding**、③は **output / decoding** でほぼ反射的な算術での九九並みの次元となる。筆者自身は各々文例の超高速黙読(super-rapid silent reading : SRSR)、Basic 文への縮約変換例の思索、理論面からその **panopticon** (パノプティコン) の透かし見に関心を向けている。前回 diachronic (D) 的と synchronic (S) 的な言語研究は対立しない旨に触れたが、D と S は大学の英語学の「総論」では必ず提示する基本概念である。

今回の(1)は G-7 会談で Trump 氏のフランス滞在中での tweet、(2)は帰国後の tweet であった。ある種の英文がスラスラ流れに乗って読めないのはその文に対応できる **pattern practice** が足りないわけである。読んで分からなければ聴いても分からないことになる。のらりくらりではなく、発話されたものとも仮定し秒数を勘案しての各モデル文の超高速での 'Read, read and read!' である。

(1) My Stock **Market** gains must be judged from the day after the Election, November 9, 2016, **where the Market went up big after the win, and because of the win. Had my opponent won, CRASH!** (August 25, 2019)

▲G-7 首脳会談で何か関連話が出たのか？自分が 1 期目大統領選勝利 の状況での株価跳ね上がりを振り返っている。「わが政権の株式市場上昇は 2016 年 11 月 9 日 (選挙翌日) から判断する必要がある、あの状況では勝利後で大幅の高値であった、もし対抗馬が勝っていたら市場は崩壊だっただろう！」。

ここでの文中の日付 November 9 (11/9) に関連し Worst Mornings of the 21st Century : 9/11 & 11/9 という Net 上での投稿表示を見たが何を意味するか？容易に分かる。「21 世紀最悪の朝 : 9/11・11/9」であるが、9 月 11 日の朝とは、例の 2001 年 9 月 11 日の米国同時多発テロ事件 のこととなる。そして 11 月 9 日の朝とは、Trump 氏が前日の大統領選挙での勝利 (1 期目) が確定しその宣言をした 2016 年 11 月 9 日の朝 である。この「2 つの日の朝が 21 世紀米国最悪の朝」だというわけで、大変な皮肉である [就任日は年越しの 2017 年 1 月]。米国にとって「9」と「11」は魔の数字か？

なお、聖書では「7」を完全ナンバー、「6」をその 1 つ欠けた不吉な不完全ナンバーとする見方がある。「6」が 3 つ揃った「666」が悪魔の数字で、新約『ヨハネの黙示録』では天地滅亡の日が近づくとこの数字「666」の刻印が押された獣 (beast) が現れるとする。その獣は人間であり、他は誰もモノの売買はできないと記す。それを **BBE : The Bible in Basic English** (1949) から引用し次に示しておく [韻文用語でプラス α Basic 語 *beast* のイタリック体表記、省略部の破線、下線は筆者]。

... No man might be able to do trade but he who has the mark ... let him get the number of the *beast* ; because it is the number of a man : and his number is Six hundred and sixty-six.
— (*The Revelation of John*, 13 :17-18)

数字「666」の刻印の押された人間は商取引 (trade)・取引 (deal) ができると聖書は記すが誰のこと？ Trump 氏のこと？何のこと？その真の意味はどう解釈する？ここでは *beast* (獣) [= cruel animal or person] が Basic でのプラス α 語で韻文用語 100 語中の 1 語である。前々回(66)でも触れたが BBE には韻文・聖書用語としてのプラス α Basic 語(150 語)が全 910 頁のどの頁にも頻出する。Basic 言語を 850 語の体系だ という思い込みは BBE 読みでは振り出し (square one) に戻る。Basic 言語のプラス α 語そのものは全部で 654 語である。Basic は片手間にではなく専門的に取り組まないと本当には身につかない狭き門 であることが難点。高尚な哲学言語で深奥には容易に入り込めない。この言語理論に基づき段階式 (graded : G / semantically sequenced : SS) で流れにそった実践は実際にはさらに難しい理屈となる。

太線の Basic 語 **market** は diachronic (通時的) に見て印欧祖語の音素形/MERK/からとされ原義

は「モノを交換すること」。merchant, commerce, commercial などは同系語。ローマ神話の商業神 Mercury (マーキュリー) も関連がある。Mercury は「すい星」でもある。また、mercury は「(温度計などの) 水銀柱」のことで、速足だった Mercury 神は水銀の動きの速さとも重なっている。さらに実はプラス α Basic 語 *mercy* (慈悲) も同系 [拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(142)参照]。

太線語 *opponent* は Basic 語 **opposite, position** などと同系だと見抜きたい。語頭の *op-*, *ob-* は「逆らうこと」の意味で、*opponent* {*op* (= against, opposite) + *ponent* (= put)} である。プラス α Basic 語 *post* など同系 [同上拙著、第二部、例(91)参照]。

太線語 *crash* は擬音語(onomatopoeia)である。開口母音 /æ/ は聞こえ度が大で意味も強くなる。一方、Basic 語 **crush** も擬音語が元と考えられるが、意味は若干違う。母音 /ʌ/ の暗さからしてもやや重みを感じられる。「歯で噛み砕くこと」の意味にもなった経緯もあるようであるが、歯の重要性に対する特別な思いからか? なお、Basic 語 **smash** も母音 /æ/ をもつ擬音語で「粉々につぶれる激しさ」の語感がある。音と文字の関係の **phonics** 研究も本連載で見ているような次元まで突っ込みを入れるとよい。

下線の関係副詞 *where* はここではその「局面、場合」(case)のことで、*in which* の意味となる。

下線の文 *Had my opponent won, CRASH!* は subjunctive (叙想法) で *If my opponent had won, there would have been a CRASH!* の意味であるが、条件節の倒置と帰結節の1語で強調文である。

(2) *Just returned to Washington from France and the very successful G-7, only to find that the Fake News is still trying to perpetuate the phony story that I wanted to use Nuclear weapons to blow up hurricanes before they reach shore. This is so ridiculous, never happened!* (August 26, 2019)

▲まさに滑稽な内容。「成功したフランスでの G-7 会談を終え、ワシントンに戻ったところだが偽メディアはハリケーンが海岸に押し寄せる前に、核兵器で目を爆破することを私が望んでいるというでっち上げ話をまだ続けようとしていることが判った、滑稽な話でそんなことはありはしない!」と言っている。核兵器によるハリケーンなどの人工的破壊の構想は戦後アメリカにありはしたらしい。関連して思い出すが、Tokyo DisneySea に嵐など自然現象を空から制御し消滅させる発想で考案された仕掛け装置 ‘Storm Rider’ がアトラクションとしてあるのを見たことがあるが興味深かった。

太線語 *perpetuate* の *per* は **through** (突き抜けること) でここでは強勢がかかる *pet* 「続けること」に意味の核がある。Basic 語によりどこを求めれば **competition** が *pet* をもっている。PIE etymon は /PET/ で原義は「飛びつき求めること」である。un-Basic 語 *petition* (嘆願)、*appetite* (食欲) などは同系であるし、さらに *repeat* (繰り返す) なども同系 [同上拙著、第二部、例(148)参照]。

太線語 *hurricanes* (ハリケーン) はカリブ海やメキシコ湾で発生する熱帯低気圧で、この語の音形と語形から *root sense* として *hurry* (急ぐ) を直感すれば見事である。同系語である。

また、米国中南部などで発生する竜巻の *tornado* (トルネード) はスペイン語を経由もしているが、Basic 語 **turn** をはじめ多くの語が同系として一括される [同上拙著、第二部、例(45)参照]。さらに、インド洋あたりに発生する熱帯低気圧の *cyclone* (サイクロン) は Basic 語 **circle** をはじめ、これまた同系語の数は多い [同上拙著、第二部、例(14)および(150)参照]。なお、太平洋西部などで発生する熱帯低気圧の *typhoon* (台風) は、Basic 語 **deep** などともなった印欧祖語の語根音素形 /DHEUB/ が元で「深い水の中の怪物」のような意味が元とされている。ギリシャ神話の怪物 *Typhon* (テュポン)、また中国語「大風」も経由し英語となった [同上拙著、第三部、p188 参照]。

下線部 *reach shore* (海岸に着く) で *shore* と *coast* は違い *shore* は海から、*coast* は陸から見た海岸であり視点が異なる [本連載(53)参照]。また、英語 (米語) に *from coast to coast* という言い方があるが、これは「全米」(陸地の東端 Maine 州から西端 California 州まで) の意味である。ここでの方位の東から西への見方は米国開拓史上での事実に基づいている。なお、*beach* は *shore* の一部を指す。Basic 語 **seaside**, プラス α Basic 語 *shore*, un-Basic 語 *coast*, *beach* の4語の関係を set theory (集合論) 風を示せば **seaside** \supset *coast* \cup *shore* \supseteq *beach* となる [本連載(53)でも提示した]。

from α **through** / **past** β **to** γ (α から β を経由し γ へ) という移動事象(motion event)で、視点の絡む英語の移動経路(path)の描写法に習熟したい。Basic で *seaside* と言えば視点の問題はなくなる [プラス α Basic 語 *shore* は同上拙著、第二部、例(6)、un-Basic 語 *coast* は第三部 p.192 参照]。

次に上の tweet での output 文 (生成出力文) を decode 化により 5×n 個の項 に振り分け、無の φ (空項) も透かし見る ASMOE スクリーン上で動的 (仮現運動的)・立体的に文層として示してみる。

STATEMENT					
		THEME : NP	RHEME : VP		
STR	C/C	N ₁	COP/V	N ₂ /N ₃ /A	ADV
1	φ	φ (= I)	Just returned	φ	to Washington from France
2	and	φ	φ	φ	(from) the very successful G-7,
3	only to	φ	find	φ	φ
4	that	the Fake News	is still trying	φ	φ
5	to	φ	perpetuate	the phony story	φ
6	that	I	wanted	φ	φ
7	to	φ	use	Nuclear weapons /	φ
8	to	φ	blow up	hurricanes	φ
9	before	they	reach	shore. //	φ
1	φ	This	is	so ridiculous, /	φ
2	φ	φ	never happened ! //	φ	φ

(備考) 単一斜線 (/) は各文での意味的 2 分割線。THEME (NP) は <what it is about>、RHEME (VP) は <what is being said about NP>。表層上の φ の各項は何か? What's in there? There's there there?

[本連載(60), 前々回(66)参照]。cf. Halliday, M. の Systemic Functional Grammar (選択体系機能文法) 最初の文は STR (文層) の深い 9 層を動的 (仮現的)・立体的に見ることとなる。STR 2 で C/C の and の後ろで N₁, COP/V, N₂/N₃/A が空項 (φ) となり、次の ADV の項で the very successful G-7 が入力される。the の前に表層上は from が具現していない例で深層では ADV ということになる。

意味(meaning)の問題は思想史の流れの中での把握が必要で Ogden-Richards の *The Meaning of Meaning* (1923) や G. Blocker の *The Meaning of Meaninglessness* (1974) も古代ギリシャの哲人ソクラテス(Socrates)、プラトン(Plato)、アリストテレス(Aristotle) に関しいくつも言及する。EP 本ではこれが投影・射影(projection)された形で扱われもする。EP 本 III に『ソクラテスの弁明』(プラトン著) [英語名: *Apology of Socrates*] でプラトンが師のソクラテスの弁を記す次の箇所がある。

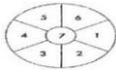
“I do nothing, men of Athens, but go about telling you, young and old, not to care for your bodies or your property so much as for your souls.” — (EP, III, p.221)

ソクラテス(469-399 B.C.)は英語の疑問詞(interrogative) what? に象徴もされる問答法(Socratic method)により「無知の知」の思想(Socratic paradox)を展開した。これは不知の自覚(awareness of ignorance)で「汝自身を知れ」という自己認識(self-awareness)であったが、ギリシャの神々(最高神は Zeus)を冒瀆しアテネの民衆(特に青年)を惑わすとされ、毒杯を仰ぐ死刑となった。EP 本 III でのこの文を Basic で言うなら “I do nothing, men of Athens, but go about saying to you, young and old, not to take care of your bodies or your property so much as for your true self.” などでよいが、ソクラテスは特別に人間の soul (psyche) [魂(精神)] を重んじた [soul はプラス α Basic 語]。また、プラトンの弟子アリストテレスに関しても EP 本 III に次の文を見る。

Everything, said Aristotle, has its own true work — or purpose — the work it can do best, the work which is right for it. — (EP III, p.227)

「物事にはその本来の purpose (目的) が宿り、目的にそう最適作用がある」という形而上学的 (metaphysical) で存在論的(ontological)な存在(existence)と場(place)の問題が示唆される。アリストテレスの見方は現代的には本連載(64)でも触れた L. Wittgenstein (L. ヴィトゲンシュタイン) や、

M. Heidegger (M. ハイデッガー) らの目的論(teleology)へともなった。Basic 言語は language control であり mind control ではないが[cf. Chomsky, N. (1968) *Language and Mind*], Richards, I. A. & Gibson, C.は *Techniques in Language Control* (1974)で次の図により 7つの核になる物事の見方を示唆し、その中核が番号 7 の目的(**purpose**)だとしている(pp.137-138) [cf. 1は選択(**selection**)]。



— Richards, I. A. & Gibson, C. (1974) *Techniques in Language Control*, p.137

ここで物事の存在原因としてアリストテレスの有名な「**四原因論**」(Aristotle's theory of the **four causes**)での4つの「原因素」を確認しておきたい。それぞれ(i) **material cause** (質料因)、(ii) **formal cause** (形相因)、(iii) **efficient cause** (作用因)、(iv) **final cause** (目的因)である。たとえば人間は人工物の「椅子」(chair)を見ての知覚・認識法は (i)木など、(ii)デザイン・パターン、(iii)手加えによる(i),(ii)からの状態変化、(iv)目的の座ることとなる。ここでは(iv)の**目的因**には特別に注目しておきたい。四原因論はプラトンのイデア的観念論(idealism)に対し唯物論(materialism)の見方ともなる[なお、chairは数「1」を背景にもつ「一人用」で、Basic語 **seat** との関係は chair \subset **seat** となる]。

さらに関連し Ogden-Richards の次の知覚に関する一節にも注目したい [下線は筆者]。

When we look at our chairs and tables we 'see' a datum datissimum, then cones, then surfaces, chair, legs-seat-back, wood, bamboo, fibres, cells, molecules, atoms, electrons... the many senses of 'see' proceeding in an ordered hierarchy as the sign-situations change.

— (*The Meaning of Meaning*, Chap. IV 'Signs in Perception', p.86)

すなわち、物質(椅子・テーブル)も ... cells \rightarrow molecules \rightarrow atoms \rightarrow electrons ...と徐々に見えない不可視の単位・無の存在となる。Ogden-Richardsは reference (指示・照応)の1つとして特異な見方の electronic reference (電子指示・照応)も示唆していて興味深い [Chap. III 'Sign-Situations', p.70 参照]。関連し文例 (Basic 文例)として When I took a good look at it, I saw it was a seat.を1つ出しておくが、EP本の背景にも上記一連の思想が projection (射影)された形で存在する [次回で確認もする]。projectionは一般科学(general science)用語としてのプラス α Basic語。

なお、プラトンとアリストテレスを描いた 15~16 世紀のイタリアの画家ラファエロの絵画は有名であるが、それを次に示す [**Basic : Panoptic English (PE)**] の範疇で若干の記述も加えておく]。



(Raffaello Santi 作の絵画)



(EP III, p.51)

The two men in this painting are Plato and his learner Aristotle in old-time Greece. Plato is on the right-hand side with his hand up (pointing to the *heaven**), and Aristotle is on the left-hand side with his hand (halfway) down (pointing to the earth). [*heaven**: one of the 100 verse words in Basic]

上のラファエロ(Raffaello)作の絵画で右側にいてジェスチャーとして手を上に向けているのが師のプラトンで、左側にいて手を下に向けているのが弟子のアリストテレスである。何を意味するか?ここでは立ち位置(position)での左右(right / left)も意味をもつが、空間の「上」は天(heaven)を指し、「下」は地(earth)を指す(世の「2」分割)と意味解釈されている。アリストテレスは師のプラトンとは若干違う見解をもっていた。彼の手の位置が全くの下ではなく半分ほど下向き(not straight down, but halfway down)となっているのはそのためか?ともあれ、プラトンのイデア論(idealism)的世界とアリストテレスの実在論(realism)的世界をそれぞれ象徴的に見ることにもなる。

また、Richards-GibsonはEP本 III (p.51)で右上の挿絵(イラスト)を用いプラトン著『国家』(*Republic*)を、聖書(*Bible*)や叙事詩 *Iliad*の作者ホメロス(Homer)の書と並ぶ世界の最も偉大な 7 書の1つとしている [ソクラテス・プラトン・アリストテレスの思想に関連しては本連載(64)も参照]。